

令和7年度 産業医科大学 医学部 医学科 「カリキュラム評価アンケート」(4年次生・6年次生対象)

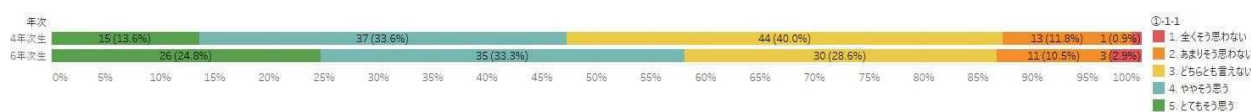
＜回答者数/対象者数＞

4年次生：110/110名，6年次生：105/105名

① カリキュラムとその主要な構成要素

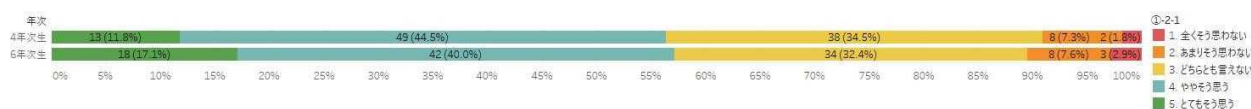
①-1 カリキュラムモデル

①-1-1. 「教育要項」や大学のホームページには，6年間のカリキュラム全体における各科目の位置付けが分かりやすく示されていた。

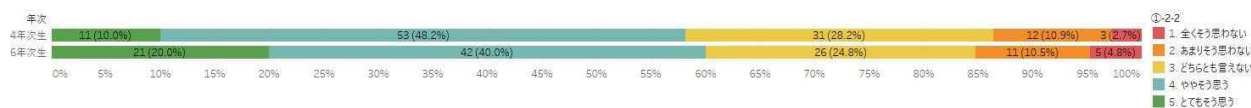


①-2 カリキュラムの構造

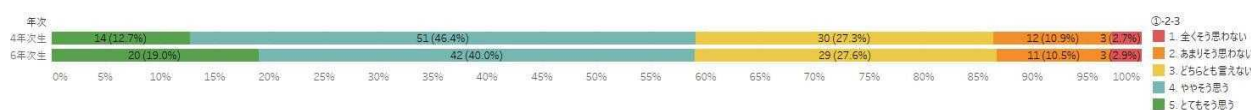
①-2-1. 医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」の修得に向けて段階的にステップアップできるようなカリキュラムだった。



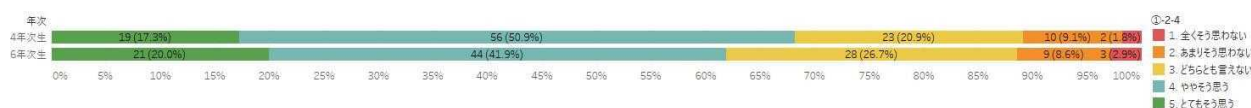
①-2-2. 科目どうしのつながりが理解しやすいカリキュラムだった。



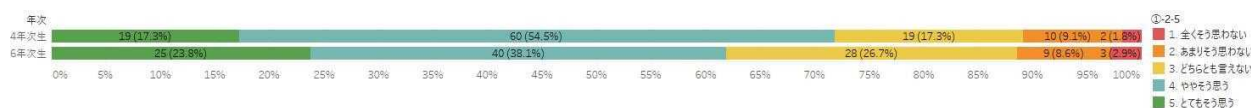
①-2-3. 学修意欲を刺激し，自分の学修過程に責任を持つことができるよう考慮されたカリキュラムだった。



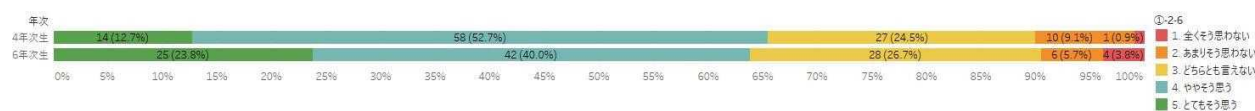
①-2-4. 総合教育や医学基礎のカリキュラムは，基礎医学，臨床医学，産業医学とのつながりが考慮されていた。



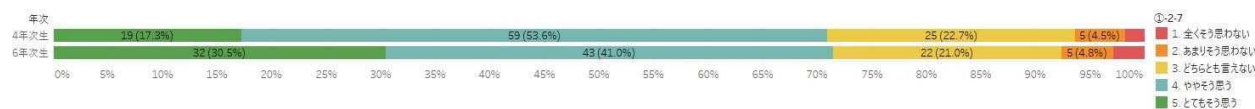
①-2-5. 基礎医学のカリキュラムは，講義と実習とのつながりが考慮されていた（実習を受けることによって，講義で学んだ知識を更に深めることができるよう考慮されていた）。



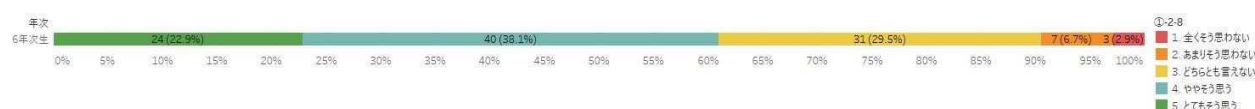
①-2-6. 基礎医学の講義や実習で学んだことが臨床医学の理解に役立つよう考慮されたカリキュラムだった。



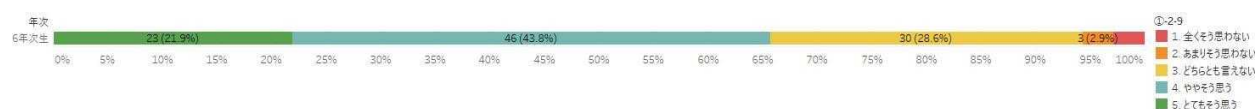
①-2-7. 産業医学のカリキュラムは、産業医学を系統的・段階的に学修できるよう考慮されていた。



①-2-8. 基礎医学のカリキュラムは、臨床実習とのつながりが考慮されていた（基礎医学の講義や実習で学んだ知識を臨床実習に役立てられるよう考慮されていた）。（※6年次生のみ回答）

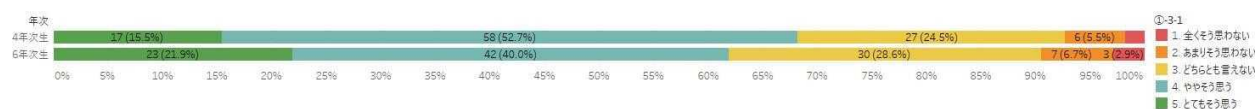


①-2-9. 臨床実習で実際の臨床に参加することによって、講義で学んだ知識を更に深めることができるよう考慮されたカリキュラムだった。（※6年次生のみ回答）

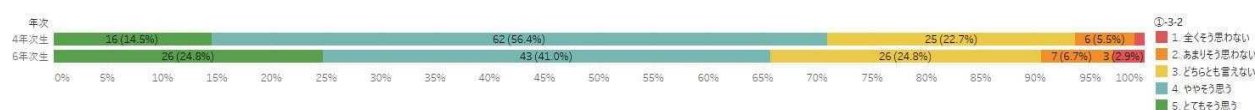


①-3 カリキュラムの構成と教育期間

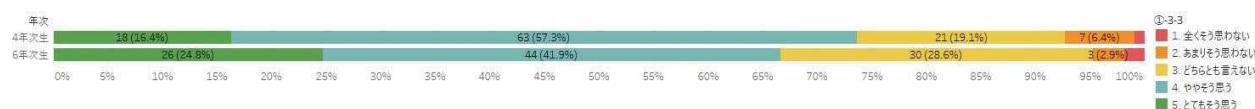
①-3-1. 総合教育・医学基礎の科目は、幅広い教養と高い倫理観をもつ豊かな人間性を培い、社会人としての素養を身につけるのに必要かつ十分なラインナップだった。



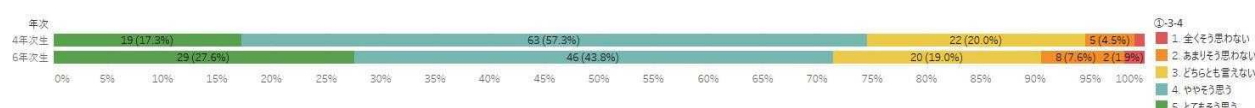
①-3-2. 基礎医学の科目は、臨床医学の学修に必要な専門知識を学び、基礎学力を修得するのに必要かつ十分なラインナップだった。



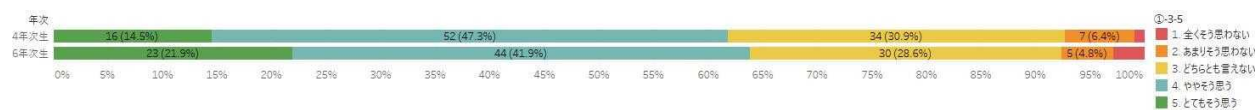
①-3-3. 臨床医学の科目は、疾病・病態を系統的に理解し、臨床における基本的知識・技能・態度を身につけるのに必要かつ十分なラインナップだった。



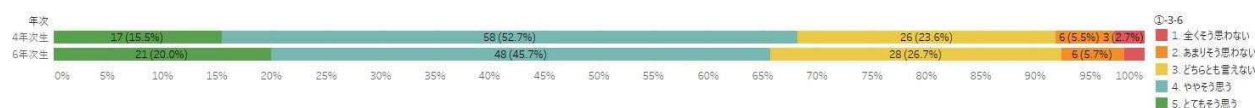
①-3-4. 産業医学の科目は、産業保健活動に必要な専門的知識と技能を修得するのに必要かつ十分なラインナップだった。



①-3-5. 医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得する上で、各科目の開講のタイミング（開講される年次や順序）は適切だった。

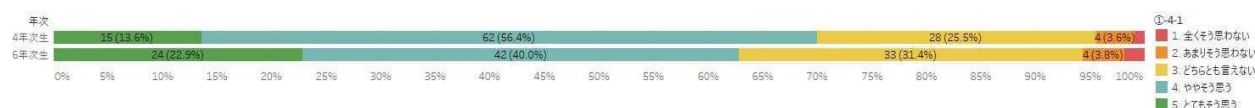


①-3-6. 医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得する上で、各科目に割り当てられた時間数は適切だった。

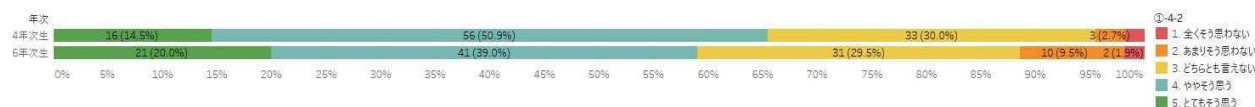


①-4 中核となる必修教育と選択的な教育内容

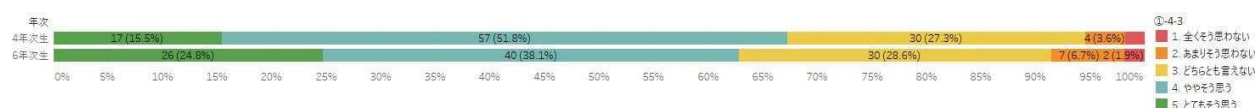
①-4-1. 必修科目では、医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得するのに必要かつ十分な内容が網羅されていた。



①-4-2. 選択科目では、医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得するのに必要かつ十分な内容が網羅されていた。



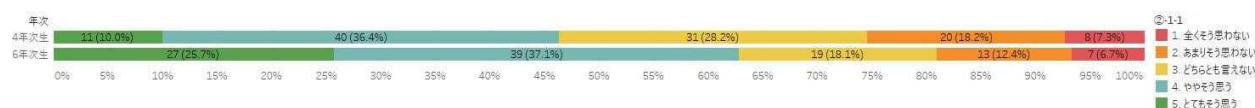
①-4-3. カリキュラム全体における選択科目の配分や開講のタイミングは適切だった（選択科目が設定されているのは1年次のみ）。



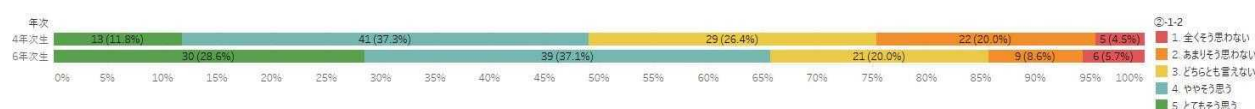
② 教育活動とそれが置かれた状況

②-1 医学部の学修環境や文化、組織や資源

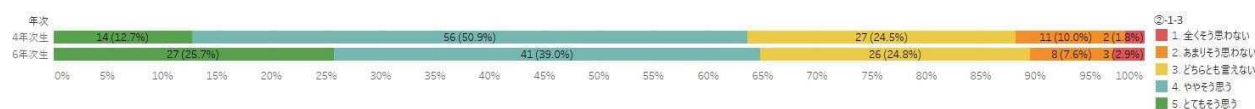
②-1-1. 医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得する上で、教室や実習室等（セミナー室、学習室、個人学習設備の個人机を含む）の設備環境は適切に整えられていた。



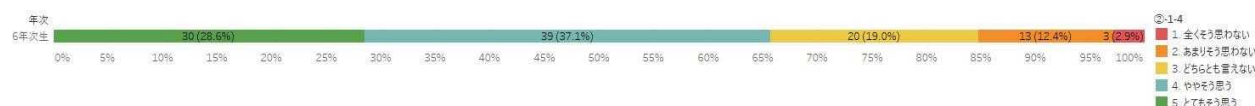
②-1-2. 医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得する上で、図書館の環境や設備は適切に整えられていた。



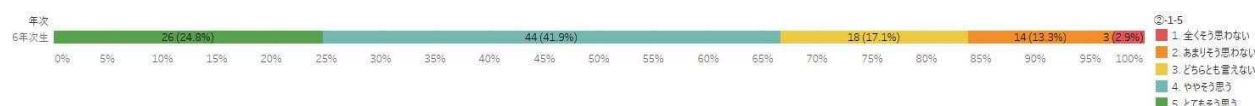
②-1-3. 医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得する上で、パソコンの利用環境は適切に整えられていた。



②-1-4. 医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得する上で、臨床実習施設（臨床技能研修室、病院、診療所、患者病棟、診断部門、検査室など）の環境は適切に整えられていた。
（※6年次生のみ回答）



②-1-5. 臨床実習では、臨床的知識を深め、実践的技能と臨床推論能力を修得するのに十分な数の患者と接し、幅広い症例を経験することができた。（※6年次生のみ回答）



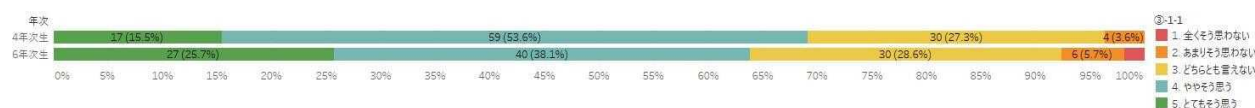
②-1-6. 臨床実習では、指導教員の適切な管理監督のもと、保健業務や診療現場を幅広く経験することができた。（※6年次生のみ回答）



③ カリキュラムの特定の構成要素

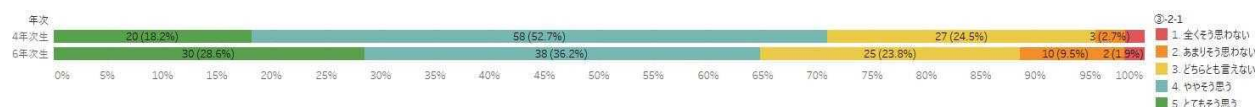
③-1 課程の記載

③-1-1. 「教育要項」には、各科目の学修目標（達成すべき知識・技能・態度）、教育計画（学修の順序・内容）、進級・卒業に必要な学則、履修規程について、必要かつ十分な情報が記載されていた。

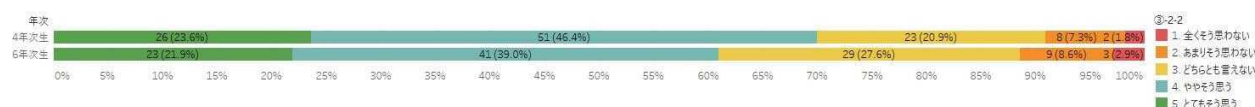


③-2 教育方法・学修方法

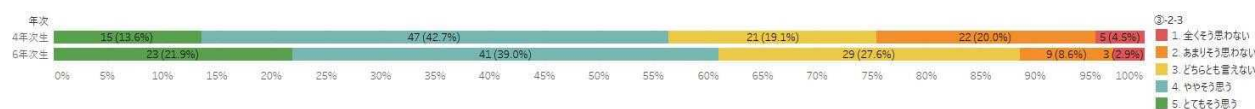
③-2-1. 「総合教育セミナー」は、学問に対する興味を抱き、自ら学ぶ姿勢を身につけるのに必要かつ十分な内容だった。



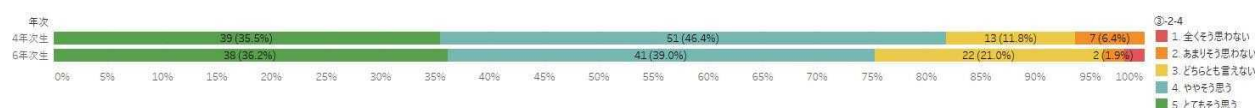
③-2-2. 「早期臨床体験実習」は、チーム医療の重要性や医療現場での医師の役割を理解するのに必要かつ十分な内容で、その後の学修意欲の向上につながった。



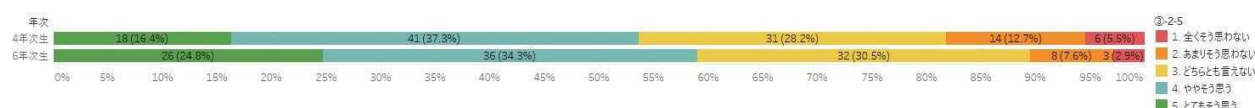
③-2-3. 英語教育は、将来国際人として活躍する医師になる志向を高めるのに必要かつ十分な内容だった。



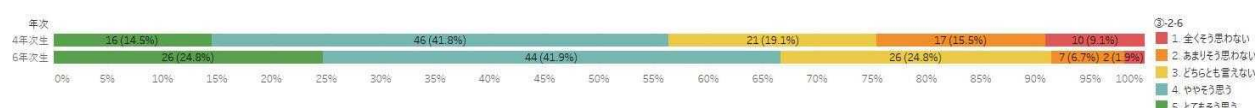
③-2-4. 「研究室配属」は、科学的思考力、自主学習能力、問題解決能力を修得するのに必要かつ十分な内容だった。



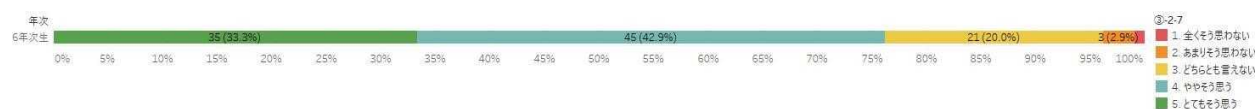
③-2-5. 問題解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力を高めるために、多くの講義や実習で「少人数対話型教育」が適切に取り入れられていた。



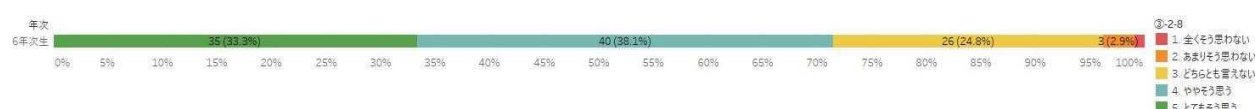
③-2-6. 必要に応じてオンラインによる講義・実習を行ったり、e-ラーニングを活用したりするなど、ICTを活用した教育が適切に行われていた。



③-2-7. 「産業医学現場実習」は、産業保健活動で実践できる能力を身につけ、産業医への志向を高めるのに必要かつ十分な内容だった。(※6年次生のみ回答)

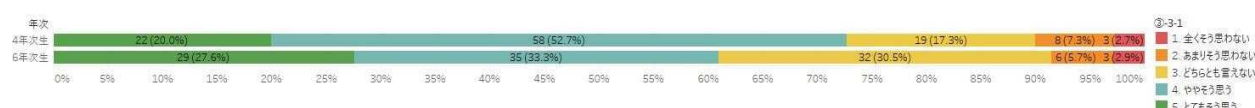


③-2-8. 臨床実習は、臨床的知識を深め、実践的技能と臨床推論能力を修得するのに必要かつ十分な内容だった。(※6年次生のみ回答)

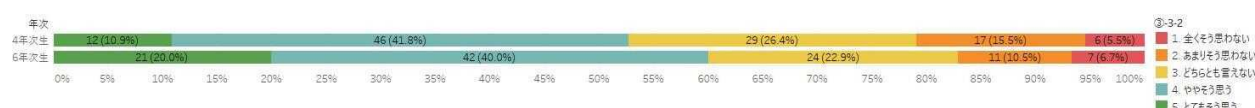


③-3 評価方法

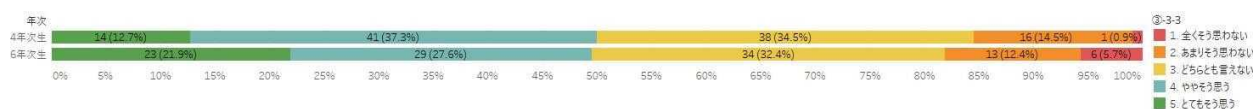
③-3-1. 医学部で実施している試験の評価方法（各科目での小テストによる形成的評価と基礎総合試験／CBT／OSCEによる総括的評価）は適切だった。



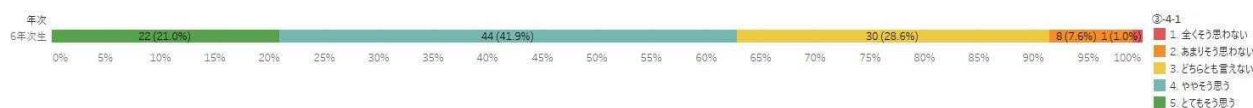
③-3-2. 試験の結果は学生にフィードバックされていた。



③-3-3. 試験の実施時期は適切だった。



③-4-1. 医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得する上で、臨床実習のローテーション（診療科の順序や診療科毎の期間）は適切だった。（※6年次生のみ回答）

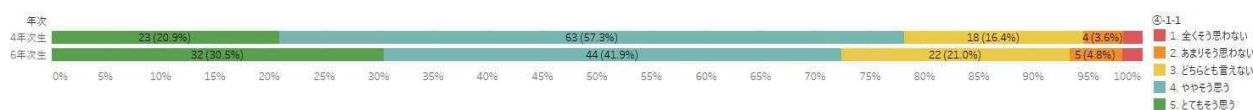


③-4-2. 医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得する上で、臨床実習の1つの班の人数は適切だった。（※6年次生のみ回答）



④ 社会的責任

④-1-1. 産業医科大学のカリキュラムを通じて学んでいることは、産業医学や産業保健の発展に寄与できるものだと思う。



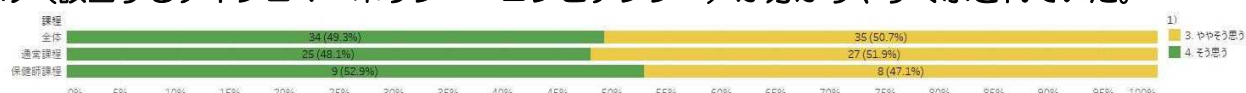
令和7年度 産業医科大学 産業保健学部 看護学科 「カリキュラム評価アンケート」(4 年次生対象)

＜回答者数/対象者数＞

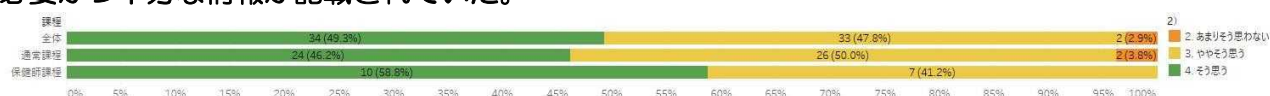
69/70 名（通常課程：52/52 名，保健師課程：17/18 名）

① 履修要項

1) 「履修要項」や大学のホームページには、4 年間のカリキュラム全体における各科目の位置付け（該当するディプロマ・ポリシー・コンピテンシー）が分かりやすく示されていた。

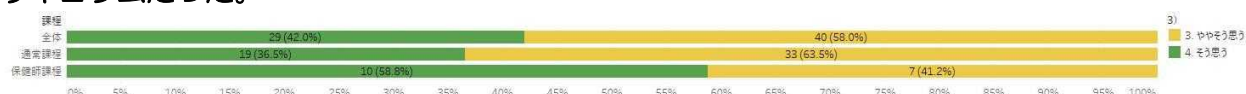


2) 「履修要項」には教育計画（学修の順序・内容），進級・卒業に必要な学則，履修規程について必要かつ十分な情報が記載されていた。

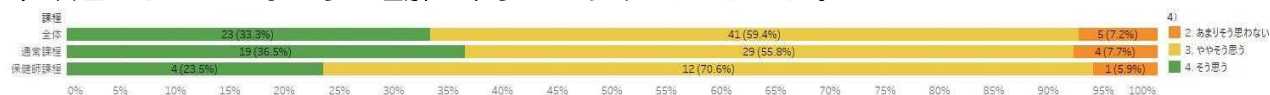


② カリキュラムの構造

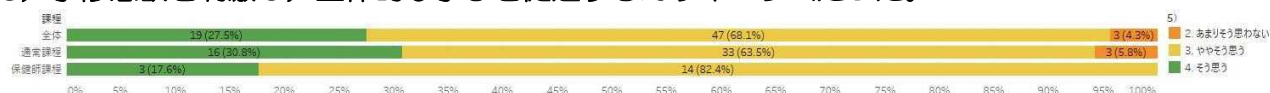
3) 看護学科の「ディプロマ・ポリシー」の修得に向けて段階的にステップアップできるようなカリキュラムだった。



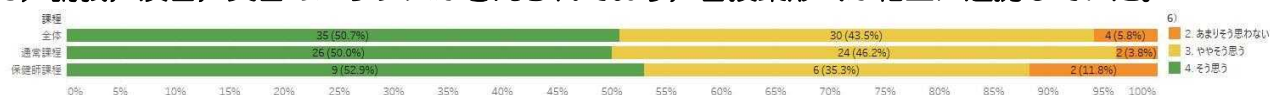
4) 科目どうしのつながりが理解しやすいカリキュラムだった。



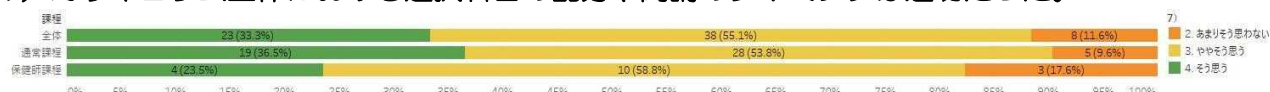
5) 学修意欲を刺激し，主体的な学びを促進するカリキュラムだった。



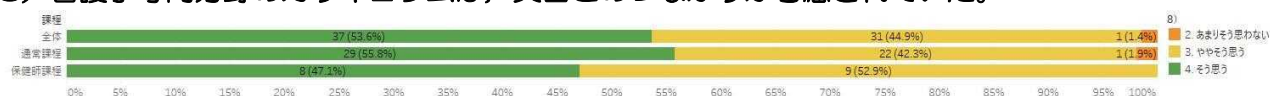
6) 講義，演習，実習のバランスが考えられており，各授業形式が相互に連携していた。



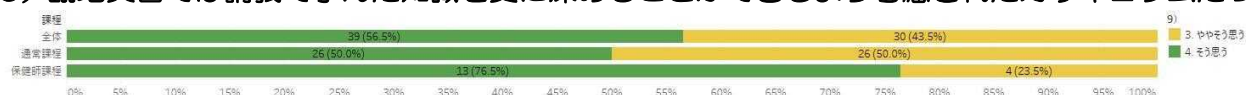
7) カリキュラム全体における選択科目の配分や開講のタイミングは適切だった。



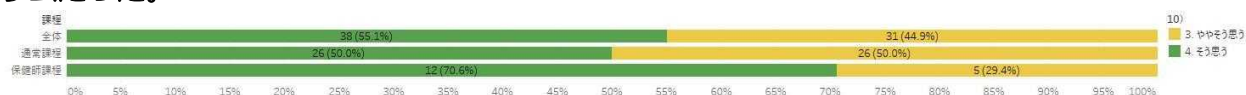
8) 看護学専門分野のカリキュラムは，実習とのつながりが考慮されていた。



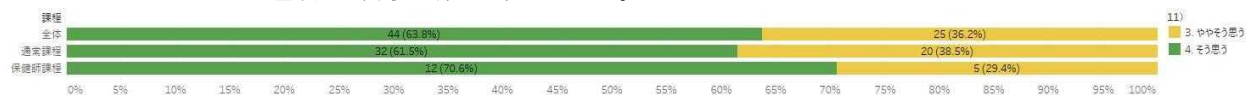
9) 臨地実習では講義で学んだ知識を更に深めることができるよう考慮されたカリキュラムだった。



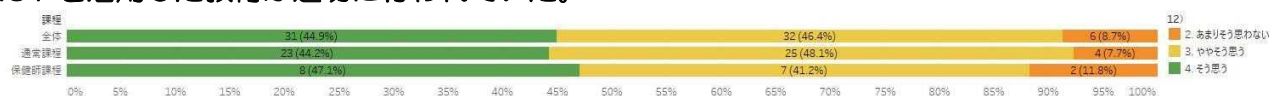
10) 4 年間を通じて産業看護・産業保健を系統的・段階的に学修できるよう考慮されたカリキュラムだった。



11) 問題解決能力，倫理的思考力，コミュニケーション能力を高めるために，多くの講義や実習でグループワークが適切に取り入れられていた。

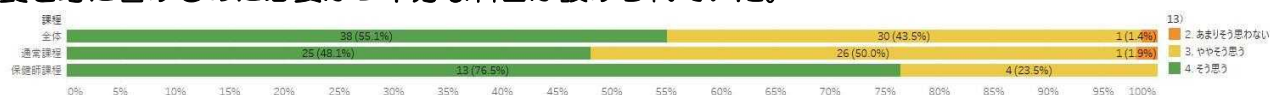


12) 必要に応じてオンラインによる講義・実習を行ったり，e ラーニングを活用したりするなど，ICT を活用した教育が適切に行われていた。

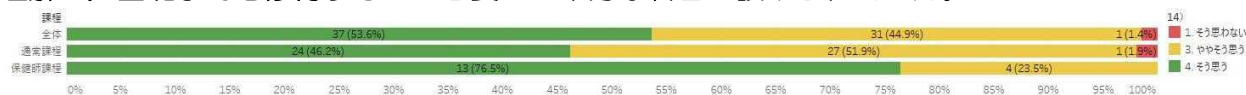


③ カリキュラムの構成

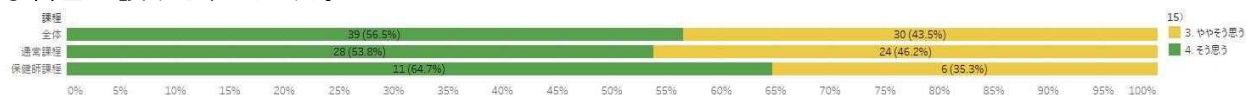
13) 教養基礎分野には，幅広い教養と高い倫理観をもつ豊かな人間性を培い，社会人としての素養を身に着けるのに必要かつ十分な科目が設けられていた。



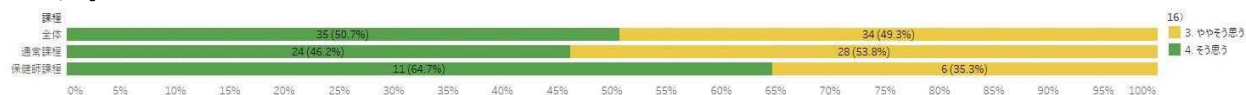
14) 看護学基礎分野には，情報科学，生活や健康支援に関する専門知識，疾病・病態を系統的に理解し，基礎学力を修得するのに必要かつ十分な科目が設けられていた。



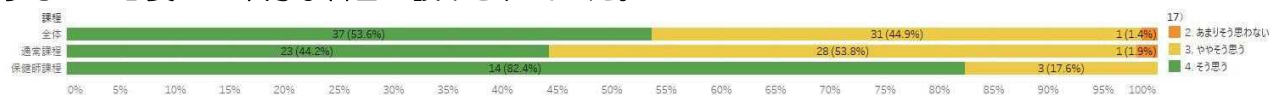
15) 看護学専門分野には，臨地における基本的知識・技能・態度を身に着けるのに必要かつ十分な科目が設けられていた。



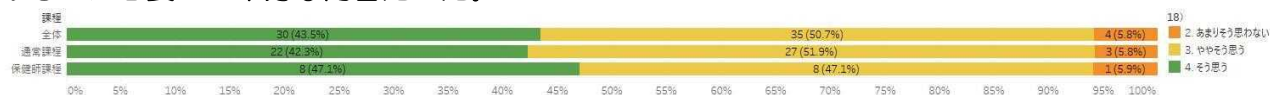
16) 看護学統合分野の科目は看護を統合・発展的に学修するのに必要かつ十分な科目が設けられていた。



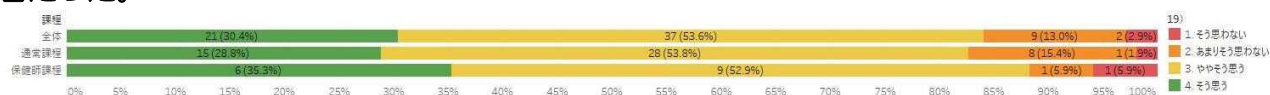
17) 公衆衛生看護系，保健学専門分野の科目は，産業保健活動に必要な専門的知識と技能を修得するのに必要かつ十分な科目が設けられていた。



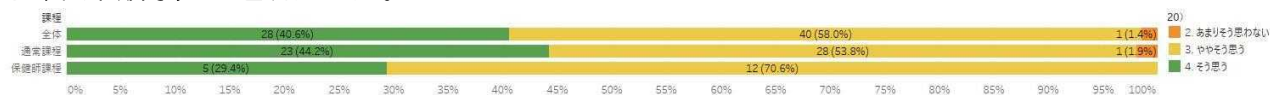
18) 大学での学修の出発となる 1 年次の科目は学問に対する興味を抱き，自ら学ぶ姿勢を身につけるのに必要かつ十分な内容だった。



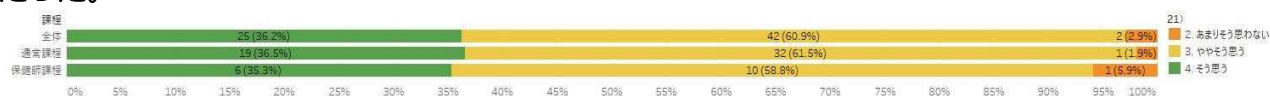
19) 外国語教育は、将来国際人として活躍する看護師になる志向を高めるのに必要かつ十分な内容だった。



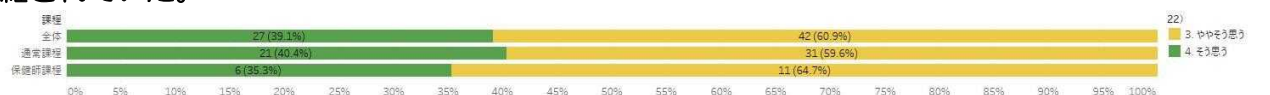
20) 看護学科の「ディプロマ・ポリシー」の到達に向け、各科目の開講のタイミング（開講される年次や順序）は適切だった。



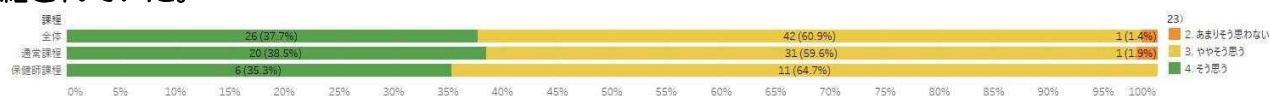
21) 看護学科の「ディプロマ・ポリシー」の到達に向け、各科目に割り当てられた時間数は適切だった。



22) 必修科目には看護学科で掲げる「ディプロマ・ポリシー」の到達に必要なかつ十分な内容が網羅されていた。

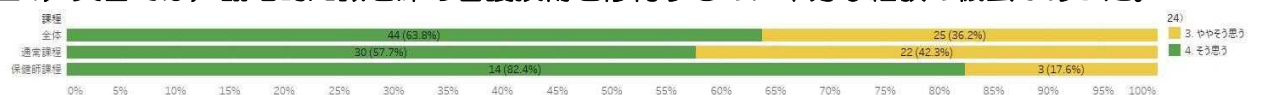


23) 選択科目には看護学科で掲げる「ディプロマ・ポリシー」の到達に必要なかつ十分な内容が網羅されていた。

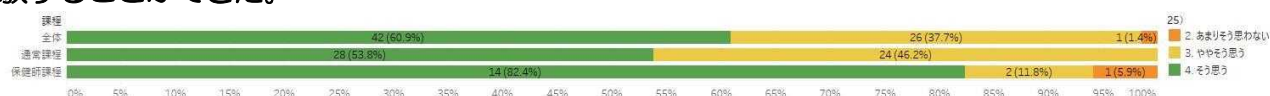


④ 実習

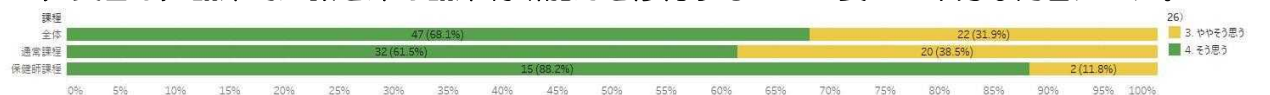
24) 実習では、臨地的知識を深め看護技術を修得するのに十分な経験の機会があった。



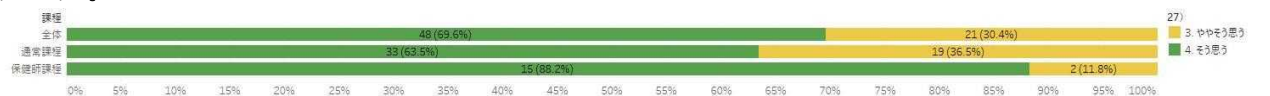
25) 実習では、実習指導者および指導教員の適切な指導のもと、保健業務や看護実践を幅広く経験することができた。



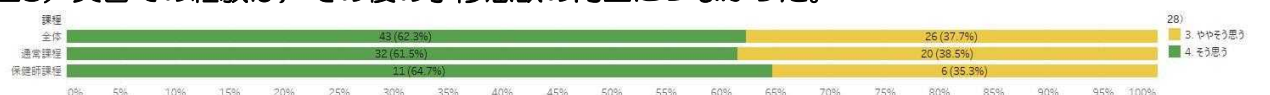
26) 実習は、臨床的知識を深め臨床判断能力を修得するのに必要かつ十分な内容だった。



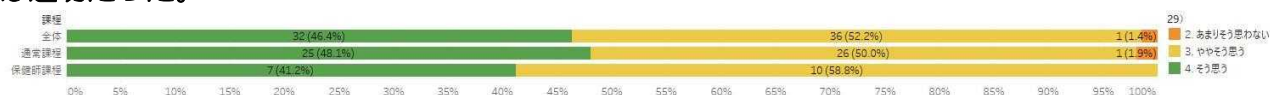
27) 実習は、チーム医療の重要性とそこでの看護師の役割を理解するのに必要かつ十分な内容だった。



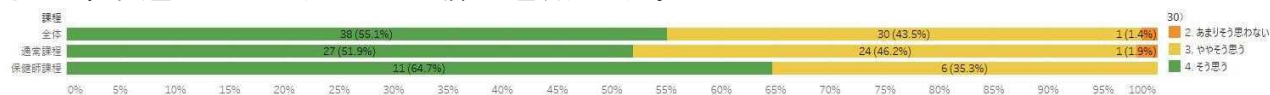
28) 実習での経験は、その後の学修意欲の向上につながった。



29) 看護学科の「ディプロマ・ポリシー」に到達する上で、実習のローテーション（順序や期間）は適切だった。

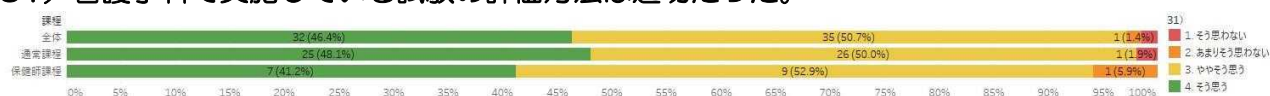


30) 看護学科の「ディプロマ・ポリシー」に沿った「コンピテンス・コンピテンシー」を修得する上で、実習の1つのグループ人数は適切だった。



⑥ 評価方法

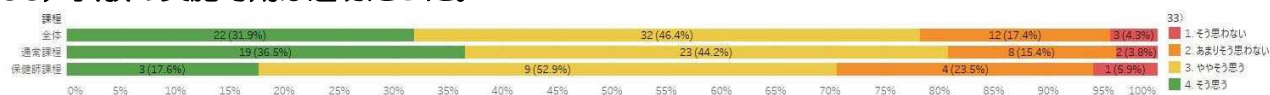
31) 看護学科で実施している試験の評価方法は適切だった。



32) 試験の結果は学生にフィードバックされていた。

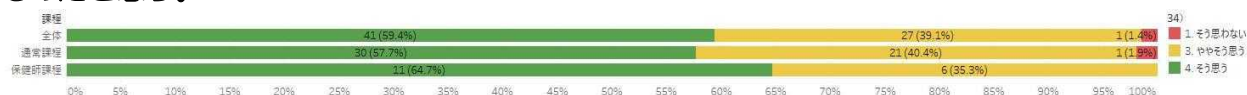


33) 試験の実施時期は適切だった。



⑥ 社会的責任

34) 産業医科大学のカリキュラムを通じて学んだことは産業医学や産業保健の発展に寄与できるものだと思う。



令和7年度 産業医科大学 産業保健学部 産業衛生科学科 「カリキュラム評価アンケート」(4 年次生対象)

<回答者数/対象者数>

18/18 名

カリキュラムとその主要な構成要素

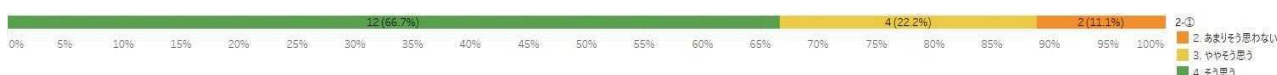
1. カリキュラム全般

1-①. 「履修要項」や大学のホームページには、4年間のカリキュラム全体における各科目の位置付け(該当するディプロマ・ポリシー・コンピテンシー)が分かりやすく示されていた。

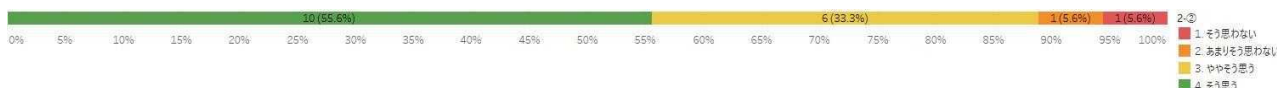


2. カリキュラムの構造

2-①. 産業衛生科学科が掲げる「ディプロマ・ポリシー」の到達に向けて段階的にステップアップできるようなカリキュラムだった。



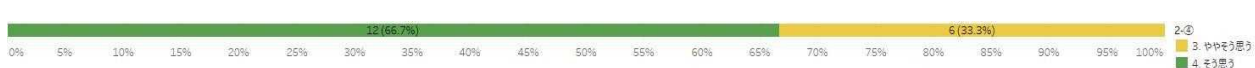
2-②. 科目どうしのつながりが理解しやすいカリキュラムだった。



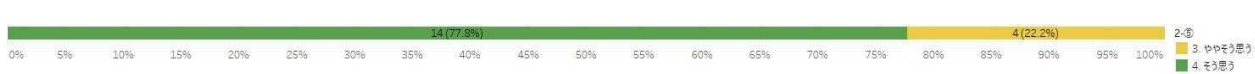
2-③. 学修意欲を刺激し、主体的な学びを促進するカリキュラムだった。



2-④. カリキュラムは講義と実習・実験とのつながりが考慮されていた。



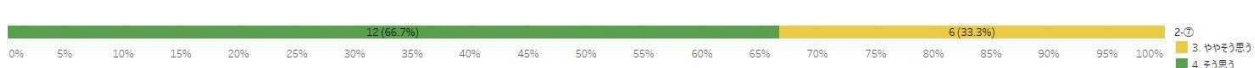
2-⑤. 作業環境管理学・作業管理学・健康管理学の3管理の分野の理解に役立つよう考慮されたカリキュラムだった。



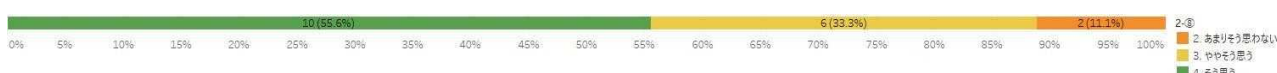
2-⑥. 労働衛生工学分野の理解に役立つよう考慮されたカリキュラムだった。



2-⑦. 産業衛生総合の分野は、労働安全衛生マネジメントシステムを系統的・段階的に学修できるよう考慮されたカリキュラムだった。

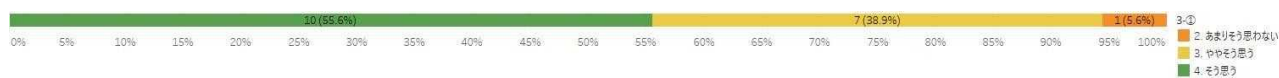


2-⑧. 本カリキュラムの講義や実習で学んだ知識を現場実習および臨地実習に役立てられるよう考慮されていた。

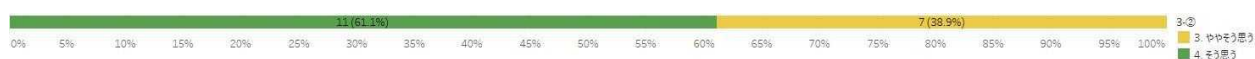


3. カリキュラムの構成と提供のタイミング・期間

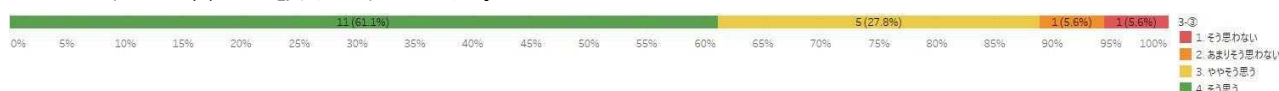
3-①. 幅広い教養と高い倫理観をもつ豊かな人間性を培い、社会人としての素養を身に着けるのに必要かつ十分な一般教養科目が設けられていた。



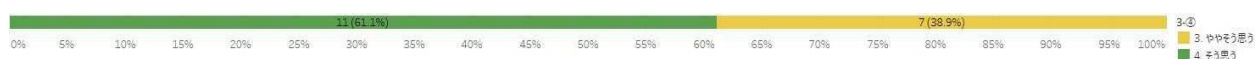
3-②. 労働安全衛生専門職として必要な基礎学力を修得するのに必要かつ十分な一般教養科目が設けられていた。



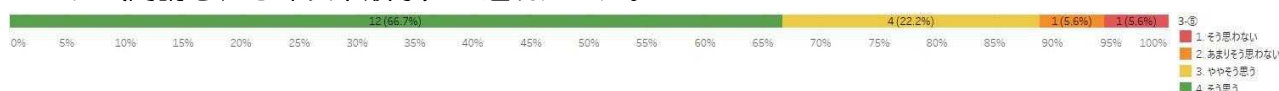
3-③. 現場における基本的知識・技能・態度を身につけるのに必要かつ十分なコミュニケーション&スキルの科目が設けられていた。



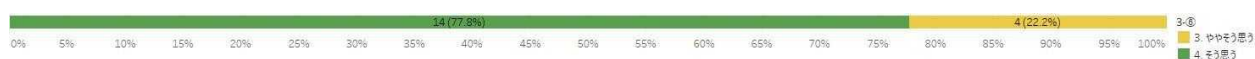
3-④. 労働安全衛生に必要な専門的知識と技能を修得するのに必要かつ十分な産業衛生総合の科目が設けられていた。



3-⑤. 産業衛生科学科が掲げる「ディプロマ・ポリシー」に到達する上で、各科目の開講のタイミング（開講される年次や順序）は適切だった。

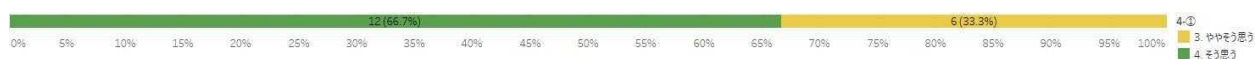


3-⑥. 産業衛生科学科が掲げる「ディプロマ・ポリシー」に到達する上で、各科目に割り当てられた時間数は適切だった。

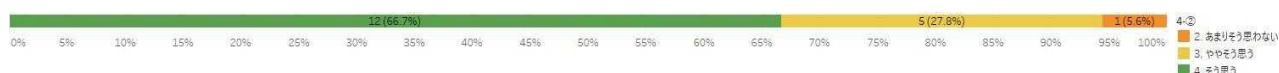


4. 中核となる必修教育と選択的な教育内容

4-①. 必修科目では、産業衛生科学科が掲げる「ディプロマ・ポリシー」に到達するのに必要かつ十分な内容が網羅されていた。



4-②. 選択科目では、産業衛生科学科が掲げる「ディプロマ・ポリシー」に到達するのに必要かつ十分な内容が網羅されていた。



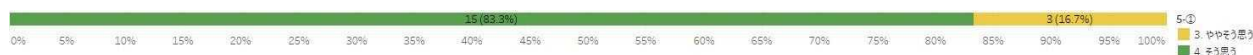
4-③. カリキュラム全体における選択科目の配分や開講のタイミングは適切だった。



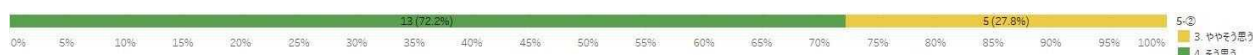
教育活動とそれが置かれた状況

5. 現場実習と臨地実習

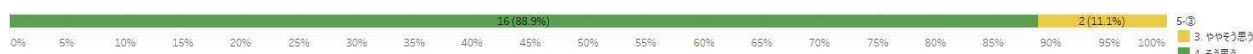
5-①. 現場実習および臨地実習では、現場に関する知識を深めるのに十分な経験をする事ができた。



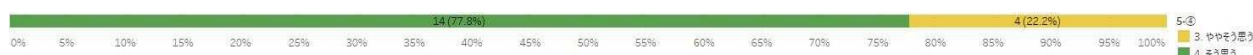
5-②. 現場実習および臨地実習では、実践的技能と推論能力を修得するのに十分な経験をする事ができた。



5-③. 医学部で掲げる「コンピテンス・コンピテンシー」を修得する上で、パソコンの利用環境は適切に整えられていた。



5-④. 産業衛生科学科が掲げる「ディプロマ・ポリシー」に到達する上で、現場実習および臨地実習の1つの班の人数は適切だった。



5-⑤. 現場実習および臨地実習は、現場に関する知識を深め、実践的技能と推論能力を修得するのに必要かつ十分な内容だった。



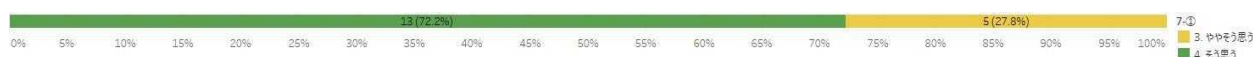
6. 学外実習のタイミング

6-①. 産業衛生科学科が掲げる「ディプロマ・ポリシー」に到達する上で、各種実習（インターンシップ、現場実習および臨地実習）のタイミングや期間は適切だった。



7. 説明の記載

7-①. 「履修要項」には教育計画（学修の順序・内容）、進級・卒業に必要な学則、履修規程について必要かつ十分な情報が記載されていた。

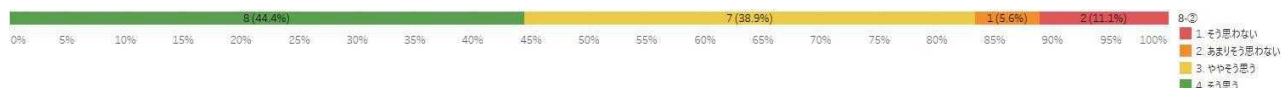


8. 学修方法

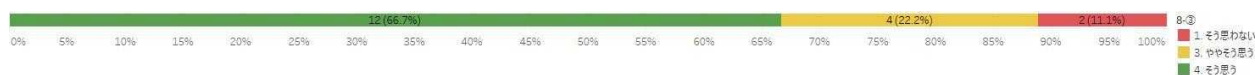
8-①. 「産業衛生科学入門」は、学問に対する興味を抱き、自ら学ぶ姿勢を身につけるのに必要かつ十分な内容だった。



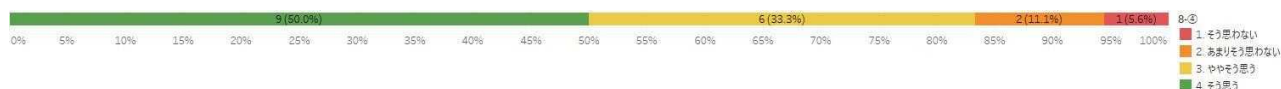
8-②. 外国語教育は、将来国際人として活躍する労働安全衛生専門職になる志向を高めるのに必要かつ十分な内容だった。



8-③. 問題解決能力，論理的思考力，コミュニケーション能力を高めるために，多くの講義や実習でグループワークが適切に取り入れられていた。

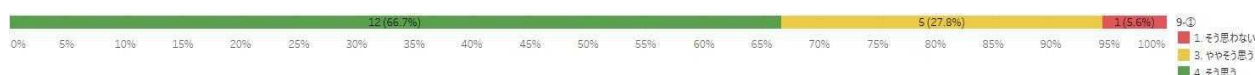


8-④. 必要に応じてオンラインによる講義・実習を行ったり，e-ラーニングを活用したりするなど，ICT を活用した教育が適切に行われていた。

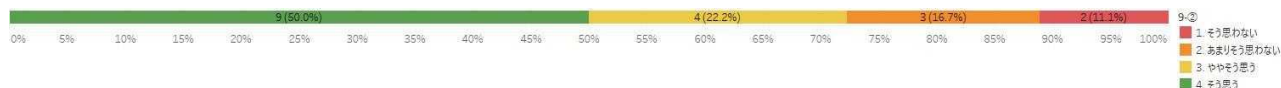


9. 評価方法

9-①. 産業衛生科学科が実施している試験の評価方法は適切だった。



9-②. 試験の結果は学生にフィードバックされていた。



9-③. 試験の実施時期は適切だった。



10. 学びの社会的価値

10-①. 産業医科大学のカリキュラムを通じて学んだことは産業医学や産業保健の発展に寄与できるものだと思う。



令和7年度 産業医科大学 大学院医学研究科 「カリキュラム評価アンケート」(本年度修了生対象)

<回答者数/対象者数>

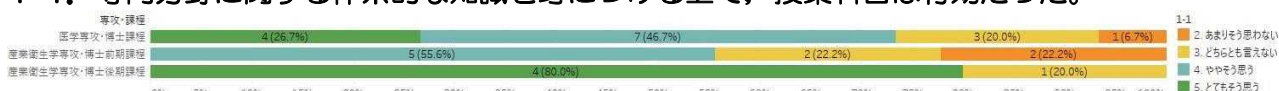
医学専攻・博士課程：15/23 名，産業衛生学専攻・博士前期課程：9/10 名，

産業衛生学専攻・博士後期課程：5/6 名，看護学専攻・修士課程：1/1 名

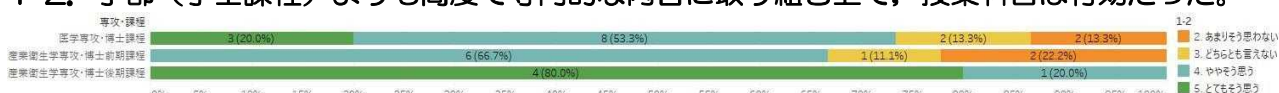
※ 看護学専攻・修士課程は回答者数が 5 名未満のため集計対象外

1. 授業科目

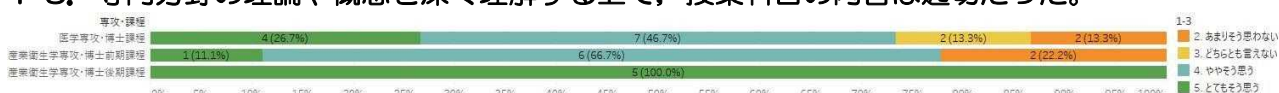
1-1. 専門分野に関する体系的な知識を身につける上で，授業科目は有効だった。



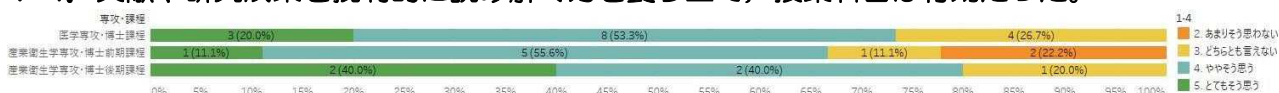
1-2. 学部（学士課程）よりも高度で専門的な内容に取り組む上で，授業科目は有効だった。



1-3. 専門分野の理論や概念を深く理解する上で，授業科目の内容は適切だった。



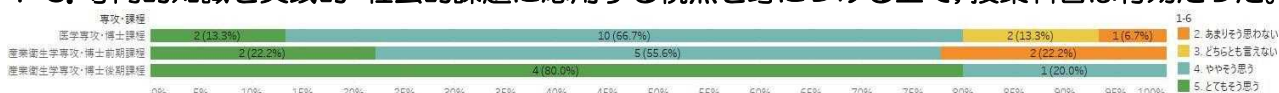
1-4. 文献や研究成果を批判的に読み解く力を養う上で，授業科目は有効だった。



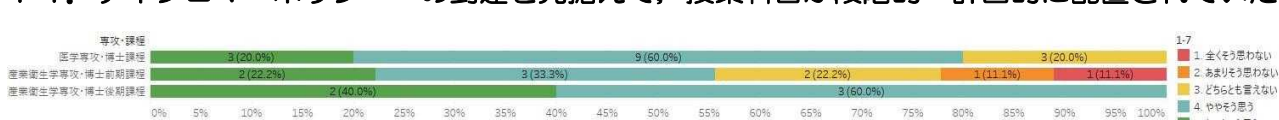
1-5. 論理的に考え，根拠に基づいて判断する力を身につける上で，授業科目は有効だった。



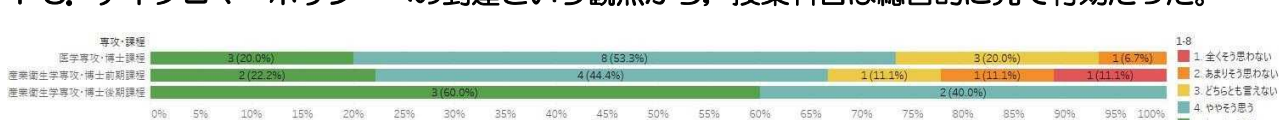
1-6. 専門的知識を実践的・社会的課題に応用する視点を身につける上で，授業科目は有効だった。



1-7. ディプロマ・ポリシーへの到達を見据えて，授業科目が段階的・計画的に配置されていた。

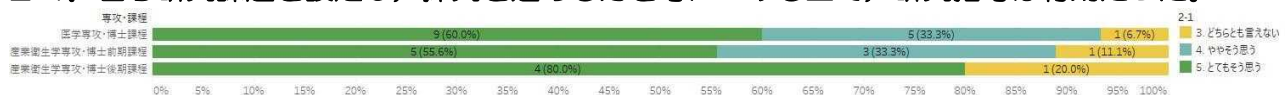


1-8. ディプロマ・ポリシーへの到達という観点から，授業科目は総合的に見て有効だった。

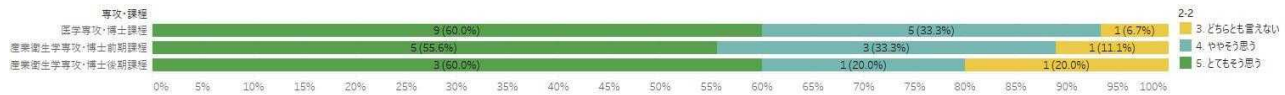


2. 研究指導

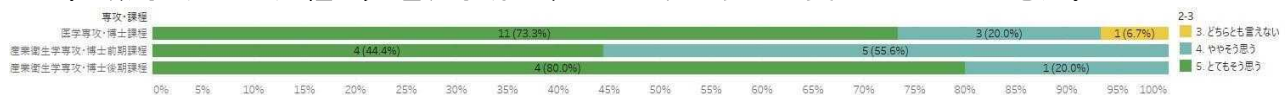
2-1. 自ら研究課題を設定し、探究を進める力を身につける上で、研究指導は有効だった。



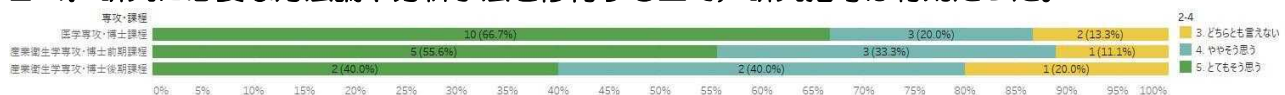
2-2. 研究計画を立案し、計画的に研究を遂行する能力を高める上で、研究指導は有効だった。



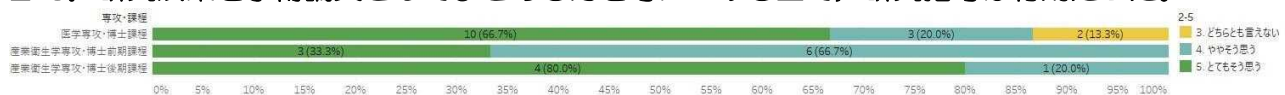
2-3. 研究を進める過程で、適切な助言やフィードバックを受けることができた。



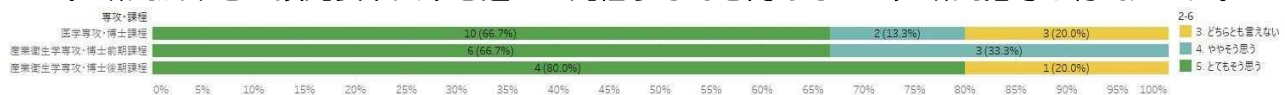
2-4. 研究に必要な方法論や分析手法を修得する上で、研究指導は有効だった。



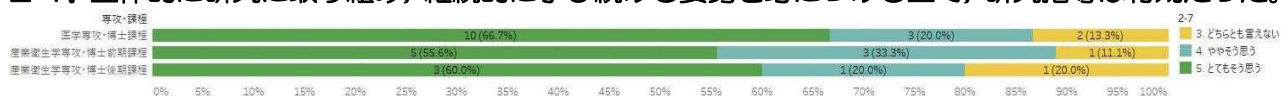
2-5. 研究成果を学術論文としてまとめる力を身につける上で、研究指導は有効だった。



2-6. 研究成果を口頭発表や文章を通じて発信する力を高める上で、研究指導は有効だった。



2-7. 主体的に研究に取り組み、継続的に学び続ける姿勢を身につける上で、研究指導は有効だった。



2-8. ディプロマ・ポリシーへの到達という観点から、研究指導は総合的に見て有効だった。

